

「お灯明^{とうみょう}」とは、お花やお香などと共に、仏様に捧^{ささ}げるお供え物の一つです。みあかしとも呼ばれ、仏様の慈悲^{じひ}と智慧^{ちえ}を象徴しているとされています。仏様にお供えをし、供養する私たちの心の中の悩みや苦しみ、いわゆる心の闇、無明^{むみょう}を明るく照らして、もののありのままの姿を明らかにし、安らぎを与え、進むべきおさとの道を照らし出して下さいます。

最近では、仏様の前にローソクなどで灯^{とも}した明かりだけでなく、野外に沢山のローソクや容器に入ったキャンドルを並べたりする使い方も見られるようになりました。

古くは、灯明皿に菜種^{なたねあぶら}油を満たして灯^{とうしん}芯をひたし、火を灯したものを指して、燃^{ねんとう}灯とも呼ばれました。昔は油が貴重でしたから、大切なお供え物だったことでしょう。東大寺のお水取りでは、今でもこの燃灯が使われているそうです。

お灯明の由来、功德を説いた

「佛説 施燈功德經」(ぶっせつ せ とう くどくきょう)というお経があります。この中でお灯明の多く功德が説かれています。

道元^{どうげん}禪師は、お灯明をお供えすることについて、『正法眼蔵^{しょうぼうげんそう}』「道心^{どうしん}」の巻で、「又、一生のうちに^{ほどけ} 仏をつくりたてまつらんといとなむべし。

つくりたてまつりては、三種^{さんしゆ}の供養したてまつるべし。三種とは、草座(そうざ)・石蜜漿(しゃくみつしょう)・燃燈(ねんとう)なり。これを供養したてまつるべし。」

とお示しになっています。仏様の前に、布製の坐具^{ざぐ}という敷物、氷砂糖を水に溶かしたものを、そして、お灯明をお供えしなさい、というお示しです。現在も曹洞宗のお寺では、お灯明はもちろん、お砂糖や蜂蜜をお湯で溶いてお供え致します。

今はライターで簡単に火を灯すことができるようになりましたが、お灯明の炎の揺らぎに多くの教えと功德を見出し、仏様にたいする尊敬の念を心の中に灯し、思いを寄せる時、深い安らぎを得ることでしょう。